

あなたは私の喜び

家山華子

奨励者紹介 [いえやま・はなこ]

日本キリスト教団三木教会牧師

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼（〔バプテスマ〕）を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて、霊が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

（マルコによる福音書 1章9―11節）

イエス・キリストが来られたことと私たち

「イエス・キリストが来られた」と聖書は語ります。このお方は、私たちと一体どんな関係があるのでしょうか。私たちの代わりにレポートを書いてくれるのでしょうか。私たちの山のように積まれた仕事を片付けてくれるのでしょうか。私たちにピッタリの彼氏や彼女を連れて来てくれるのでしょうか。そうでないとすると、「イエス・キリストが来られた」と言われたところで、私たちは、「それがどうした」という反応しかできません。私たちの今の生活とは、何の関係もないのではないか、そのように思えるのです。

リアルな感覚をつかめない私たちのことなど関係ないと言わんばかりに、聖書は、イエス・キリストが来られたこと、そしてヨハネから洗礼を受けたことを淡々と記しています。ではこのことは、今現在の等身大の私たちにとって、どんな意味があるのでしょうか。

主イエスの洗礼

私は今年の4月から、兵庫県三木市にある教会の牧師として働き始めました。教会を一人で任せられるのは初めてのことで、最初はとにかく緊張して肩に力が入っていました。三木教会はお庭がとても広く、季節ごとに四季折々の花を咲かせます。こちらが何もしなくても、ある時ふと気がつくとお花が顔を出しています。今も、スイセンが一つ二つと顔を出しはじめました。赴任してすぐの時は、そのことに気づかず、ガーデニングの本を見て、このお庭をどんなふうにも美しいお庭にしようかと、自分で計画を立てていました。しかし、夏に向かうにつれ、雑草がぐんぐん伸びてくるので、草むしりが大変になりました。そうになると、ガーデニングの本で見るようなお庭にするなんていう計画は雲の上のような話で、夏は刈っても刈っても生えてくる雑草と、一人で戦う日々でした。そんな時、教会の方が、庭仕事で得意なご家族やお友だちを連れて来てくださり、庭の木の剪定や雑草刈りを一気にしてくださいました。また、専門の植木職人の方を連れて来てくださり、庭の木を美しく仕上げてくださいました。最初は、何でも自分でやらなければならない気がしてかんでいましたが、こうして皆さんの力を借りてやればよいのだと、気持ちが少し楽になりました。三木教会での牧師の仕事の始めに、庭仕事という洗礼を受けたのかもかもしれません。

イエス・キリストは、洗礼者ヨハネによってあらかじめ次のように紹介されていました。「わたしよりも優れ

た方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない」。洗礼者ヨハネの人気が高まっていた時に、そのヨハネが履物のひもを解く値打ちもないと言っているその人は、一体どれほどすごい人なんだろうと、人々は期待したことでしょう。しかし、イエス・キリストが現れると、ヨルダン川に身を沈め、ヨハネから洗礼を受けたのです。偉い人だったら、ヨハネがしないような、人々があっと驚くこととして登場するのかもしれないと思いきや、人々がするのと同じように、ヨルダン川に身を沈め、ヨハネから罪の赦しのための悔い改めの洗礼を受けられたのです。キリストは、神の子としての自分の力を誇ることもせず、ただヨハネにご自分の身をあずけられ、ユダヤの地域で普通に生活をする人々と全く同じものとなられたのです。

天が引き裂かれる出来事

その時、不思議なことが起こります。イエスが洗礼を受けて川から上がるとすぐに、「天が裂けて、霊が鳩のように御自分に降って来るのを」、主イエスご自身が見た、と聖書に書かれています。私たちは、天から雨や雪が降ってくるのは、この目で見ることはできますが、霊が鳩のように降ってくるのを見た人はいないのではないのでしょうか。また、天がドアのようにゆっくり開くというような静かな描き方ではなく、「天が裂ける」という激しい描写で、まるで全世界に衝撃が走るような印象を与えています。

昔から、イスラエルの人々は、自分たちの計画や考えを打ち破って、神さまの力が働いてくださることを、天が裂けて降ってくるというふうに言っていました。エルサレムの町が滅ぼされ、バビロンに捕囚として連れて行かれた時、神さまからもう見放されたのではないかという絶望の中で、「どうか、天を裂いて降ってください」と心の底からの祈りをささげる預言者がいました。神さまがいるとは思えないような現実の中で、将来に希望を見いだせないような状況の中で、そこでこそ、自分たちを越える力の存在を信じるように人々を励ましていたのです。

23年前の今日、阪神・淡路大震災で多くの方々の命が犠牲になりました。私は当時東京の大学に通う学生でしたが、春休みの短い期間、大学からボランティアとして派遣されて、神戸の地を訪れる機会が与えられました。倒壊した町の様子を見た時には、人間のすることのむなしさを覚えました。外から訪ねて行った者でさえ言葉を失う状況でした。まして、ご自身の家や家族を失われた方々は、もっと大きな悲しさや、むなしさを抱えておられたことと思います。神さまはどこにおられるのか。神さまなんていないのではないのか。そう思えるような状況の中で、それでもなお、聖書は私たちに祈りの言葉を与えるのです。「どうか、天を裂いて降って来てください」と。

そのような叫ぶような祈りの中に、イエス・キリストは来られたのです。そして、人々と同じところに立ち、同じ重荷を担い、同じように身を低くしてくださったのです。この低くなられたイエス・キリストと、悲しみの中から叫ぶ人々の祈りとを結ぶように、この時、天が裂けて、霊が鳩のように降ってきた、というあり得ないような出来事が描かれています。私たちの想像を超えたところからくる、神さまの力の介入です。神さまは一体どこにいるのか分からないと思えるような人間の現実があります。まるで沈黙しておられるように見える神さまの存在が、天が裂け、そして語り始めるのです。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と。

あなたは私の喜び

この言葉は、神さまからイエス・キリストに向けて語られている言葉です。ここで最も強調されているのは、イエス・キリストは神さまの大切な子どもだということです。「わたしの心に適う者」という表現は、直訳すると「あなたはわたしの喜び」という表現になります。神さまから「あなた」と呼ばれる親しい親子の関係の中で、その存在を喜んでいるというストレートなメッセージが、父親から息子に伝えられています。

ローマの信徒への手紙8章14節には、「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」と記されています。聖書は、私たちもイエス・キリストと同じ神の子であることを証しています。私たちにも、「あなたはわたしの愛する子、わたしの喜び」という声が語られているのです。

私は、専門学校で学生さんに授業をする機会がありますが、そこで、皆さんに座右の銘や心に残っている言葉を書いてもらったことがあります。みんないろいろなことを書いてくれました。その中には、「努力は必ず報われる」とか「何事もやらないで後悔するより、やって後悔する方がいい」など、一歩踏み出すことへと背中を押されるような言葉がありました。また、「笑顔」という言葉や、「ありがとう」という言葉のように、その人の存在を肯定するような言葉も書いてくれました。しかし、どちらかというと、行動を促してくれるような励ましの言葉が書かれることが多いように思います。何か新しいことにチャレンジしてみたいけれど何をしたらよいか迷っていたり、失敗を恐れて一歩が踏み出せない時、歌の歌詞やドラマの中のちょっとした言葉に支えられることがあります。しかし、もし私たちが、行動することを求められるだけだとしたら、私たちはいつか疲れ切ってしまうと思います。私たちの社会は、いつも何かをすることを求められ、そのことによって人から評価を受けようと必死に生きているのかもしれない。しかし、もし私たちが人の評価だけを求めて生きているのだとしたら、そのような評価をなかなか受けられない時、私たちはどのように生きていくことができるのでしょうか。

もし、友だちとの関係が、ノートを借りるためだけの関係だとしたら、その役割を終えた後、その友だちは必要なくなってしまうのでしょうか。何かの役割を果たすために私たちが生きているだけだとしたら、そこには何か足りないような気がします。大きな災害で一瞬のうちに命を奪われるという出来事を前にした時、私たちの人生には、いつ何が起るか分からないということをおぼわされます。一人の親しい人の死を経験すると、今与えられている出会いが奇跡のように思えてきます。私たちは、今与えられている出会いの中で、共に神さまからの声を聴きたいと思うのです。「あなたはわたしの愛する子、わたしの喜び」という声を、私たちに、また私たちに与えられている家族や友だちに語りかけられる声として聴くことができればと思うのです。何かの役割を担うより前に、私は喜ばれている存在なのだということを、心の深いところで受け止めることができればと願います。また、今与えられている一人ひとりとの出会いの中で、「あなたはわたしの喜び」というメッセージをもって出会うことができればと願うものです。

私が以前お世話になっていた牧師にかけられた言葉で、とてもうれしかった言葉があります。私はその言葉を思い出す度に、いつか私もそのような言葉がかけられる人になりたいと思っています。それは、失恋をしてしまった時のことでした。私は傷ついた心を引きずりながら、オルガンの練習のために教会へ行きました。私の様子がおかしいことに気がついた牧師は、私の話をじっくり聴いてくれました。そして、一通り話し終えると、「はなちゃんは十分に彼のことを愛したよ」と言ってくれたのです。完全に私の片思いだったという結果にショックを受けていたので、これまでの自分の時間を返してもらいたいような気持ちになっ

ていました。でも、私のこれまでの様子をそばで見てくれていたその牧師から、そのように言ってもらえた時、私のこれまでの時間も含めて丸のまま受け入れてもらえたと思いました。本当にうれしかったです。

イエス・キリストは、洗礼の時に人々と同じように、水の中に身を低く沈められました。イエス・キリストの生涯全体が、身を低く沈めるための生涯でした。最後までとことん低くなり、十字架の死の苦しみを担われました。私たちは、できれば苦しみは避けたい、傷つきたくないと思うものです。しかし、私たちには、その人にしか担えない重荷があるのかもしれない。私たちだからこそ与えられる試練があり、またその苦しみをとおった私たちだからこそ、理解できる誰かの悩みがあるのかもしれない。苦しみの中にあっても、神さまは私たち、「あなたはわたしの愛する子、わたしの喜び」と、いつも私たちを見捨てずに、語り続けてくださるお方です。そして、そのメッセージは人と人のかかわりの中でも受け取ることができるのです。悲しみの中にある時、重荷を抱えている時、そっと心を寄せてくれる人がいるだけで、自分が肯定されているということが分かります。そして、私たちがそのように誰かの苦しみ、悲しみに寄り添い、誰かのために身を低くする時、私たちが「あなたはわたしの愛する子、わたしの喜び」という言葉を共に受け取り直すことになるのではないのでしょうか。

私たちは時に、自分で自分を否定する暗闇に捕らわれてしまうことがあります。自分なんてダメだと思ってしまうこともあります。しかし、そのような暗闇を引き裂く力を、神さまの言葉はもっています。「あなたはわたしの愛する子、わたしの喜び」と語りかける声を、イエス・キリストと共に聴き、私たちの心の深いところに刻み込むことができたらと願います。また、今私たちに与えられている出会いを喜び、苦しみや悩みを共に担う者となるように、導かれたいと願います。

2018年1月17日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録